

言葉のお薬

幼少期から夢見たバスケットボールのインターハイ 2 週間前の練習中、ジャンプ後の着地時に感じた猛烈な痛み。診断名は開放骨折、全治 3 ヶ月。そのまま夢が叶うことはなかった。毎朝 4 時半起床、22 時帰宅の生活を支えてくれていた両親や顧問の先生方、チームの仲間への申し訳なさや自分の不甲斐なさを感じ自暴自棄に陥っていた。当時は周りに言われるがまま総合病院に通院し、言われるがままリハビリをさせられていた状態で、車椅子でリハビリ室に運んでもらうたびに自然と涙が溢れ出た。そんな時、1 人の男性患者が私に「どうしたんよ、そんな暗い顔してー！」と笑顔で話しかけてきた。これが私に「言葉のお薬」をくださり、私が看護師を夢見るきっかけとなった男性との出会いだった。通院する中でその男性と関わる機会が多く、徐々にお互いのことも話し、その男性が筋萎縮性側索硬化症（ALS）を患われている患者であることを知った。しかし男性は ALS を患っているとは思えないほど明るい笑顔でいつも私に話しかけ、元気をくださっていた。徐々に自分の体が思うように動かなくなる恐怖と戦っているにも関わらず、どうしてそんなに前向きでいられるのか不思議であり、骨折ごときで落ち込んでいた自分が情けなく感じた。ある日男性に対して私は「どうしてそんなに毎日笑顔でいられるんですか。」と尋ねた。すると男性は「そりゃあ、医者から診断された時は深く落ち込んだよ。でもね、人間生きとるだけで丸儲けやからね。世話してもらおうとるわしが暗い顔しとるんじゃ意味なかるうね。」と微笑みながら答えてくださった。そこから私は少しずつ前向きになることができ、リハビリに対しても積極的に取り組みようになった。男性と話すと自然と笑顔になることができ、元気になることができた。男性はいつも私に「言葉のお薬」を届けてくださっていたのであった。

通院生活最終日、男性から「将来は何になるん？」と聞かれ私は迷わず「看護師になります。」と答えた。すると男性は「そうかそうか、頑張っってね。わしのような病人にはちょっとした言葉とか仕草とかが薬よりも力になることがあるからね。今まで有難う。」と笑顔で言った。怪我をしたことで選手としての全国大会出場の夢は叶わなかったが、一人の男性と出会うことができ、「言葉のお薬」という魔法の力を感じることができた。

看護師は医者のように手術をしたり、理学療法士のようにリハビリをしたりして患者の力になることはできない。しかしどのような医療従事者よりも患者様やご家族にとって一番近い存在であると私は考える。

男性のように周りに元気を与えられるような大人になるために、そして一人でも多くの患者様に「言葉のお薬」を届けられる看護師になるために、患者様との時間を大切にしながら関わらせていただきたいと考えている。